

生産的なひらめきを行うための研究

A study of productive insight

1K07A136-9

田中 伊久磨

指導教員 主査 山崎 勝男

副査 内田 素直

【第1章～序章～】

筆者は大学生活の多くをビジネスと向き合ってきた。当然、組織の中には生産性の高い人、低い人さまざまなのであるが、どうも生産性の高い人たち、つまりクリエイティブなひらめきを生み出し仕事にそれを活用している人たちには、その思考プロセスについて一定の類似性がみられるのではないかと疑問をもつようになった。もし同じような思考プロセスを踏んでひらめきを生み出しているのであれば、それは一般論化することができ、私たちのだれもがより生産的になれることを意味している。

また、思考プロセスだけではなく、ひらめきやすい心身の状態というものが存在するように思える。問題解決を図る際、たとえばお風呂に入ってリラックスしているとき、運動をしているとき、またはその後、新しい発見、ひらめきを生み出す際には特徴的な環境条件があることが珍しくないように思える。本論文では、以上のような筆者の疑問から、ひらめきとは一体どういった現象なのかを明らかにする。そして、過去のエピソードや事例を分析し、最終的には誰しもが効率的で生産的なひらめきを行える状態を探ること、それを一般論化することを目的とする。

【第2章】

ひらめきとはどういった現象なのか、まずはその定義を明確にする。私たちはよく問題解決する際に、あれこれと思考した揚句、突然ふと解決を図ることがある。これは誰もが経験したことであり、ひらめきとはある日突然起こるようなものである。また、ひらめきとは認知心理学の分野では洞察 (insight) のプロセスの一部または、洞察に相当するもの、であるといわれている。洞察プロセスの代表的研究を検証し、私が考える誰しもが行うことが出来る生産的なひらめきへのプロセスを提唱する。

【第3章】

ひらめきの特徴をまとめ、それらの研究を紹介していくことで、より深く生産的なひらめきについての知見を深めていく。特に先入

観を排除することや、潜在意識がどのようにひらめきに関与しているかなどについてまとめ、ひらめきを行うためのプロセスでの重要なポイントを明らかにしていく。

【第4章】

生産的なひらめきのためには演繹的な論理展開、帰納的な論理展開を常に意識し、論理的思考を身につけていかなければならない。たとえひらめきを得たとしても、実際に社会で使えるようにするためには、そのひらめきを実際に精査し、検証することが不可欠であるからだ。また、情報の収集・利用の重要性から、フレームワークの利用を推奨する。フレームワークは誰しもが気軽に、一定レベル以上の思考を獲得できる素晴らしいツールである。自身のレベル・環境に合わせて様々なフレームワークを使いこなすことが生産的なひらめきのために重要なことだと考える

【第5章】

ひらめきには、ひらめきを生み出しやすい、心身の状態、あるいは環境条件があると考えられる。過去のエピソードを検証し、その状態についての提唱を行った。アルキメデスの浮力発見、ニュートンの万有引力発見などのエピソードを検証していくことで、その状態を探ることが出来る。

【第6章～まとめ～】

生産的なひらめきのためには、圧倒的な情報量とそれを的確に分析する論理思考が必要であることが分かった。シンプルに考えれば、誰しもが生産的になれる、とは圧倒的な情報量を用いること、論理思考を磨くことで達成できるように思える。また、非常に興味深いこととしては、プライミングがひらめきを意味づけているのであれば、ひらめきとは情報量に依存しているのではないかということである。このことについての検証は本論文において十分ではないが、しかし相関関係はあるように思える。